

デジタルと掛けるダブルメジャー大学院教育構築事業 令和4年度選定事業

人文社会科学分野におけるDX推進エキスパート人材育成のための大学院新学位プログラム

～教育データサイエンスプログラムとソーシャルデータサイエンスプログラムの設置～

外部評価結果報告書

2025年12月

広島大学大学院人間社会科学研究科

目 次

I. はじめに	4
II. 外部評価委員会委員一覧	5
III. 外部評価実施概要	6
1. 概要	6
2. 評価項目	7
3. 評価レベル	7
4. 配付資料	8
5. 意見交換概要	8
IV. 外部評価項目別評価結果	18
①学務関連	18
(1) 教育・ソーシャルデータサイエンスプログラムの基本理念, 輩出する人材像は, 社会の 要請を反映したものになっていますか。	18
(2) 教育・ソーシャルデータサイエンスプログラムのカリキュラムは, 必要な内容を含み, 体系的な編成となっていますか。	19
(3) 学務関連活動を企画・運営する上で, 学内の関連部局と連携し, 必要な運営体制が適 切に整備され, 機能していますか。	20
(4) 教育リソース(ICT 環境, 統計データ利活用等)は適切に整備されていますか。	21
②学生の受入れ	22
(5) 学生の受入れについて, 入学者受入方針に沿った, 適切な体制により受入れが行わ れていますか。	22
(6) 学生の受入れについて, 入学定員に対して適切な数の入学実績が上がっていますか。	23
③学生生活・進路関連	24
(7) 学生入学後の初期指導・オリエンテーションは充実していますか。	24
(8) 学生のニーズに応え得る学習相談・キャリア相談・ハラスメント相談の体制を整備し, 助言, 支援が行われていますか。	25
④DX 推進人材育成大学院ダブルメジャー事業	26
(9) DX 推進人材育成大学院ダブルメジャー事業の実施計画・継続性は, 十分なものに なっていますか。	26
(10) DX 推進人材育成大学院ダブルメジャー事業選定時において付された留意事項へ の対応は, 適切に行われていますか。	27
⑤その他	28
(11) 他教育機関・企業・自治体等との連携は十分に活用されていますか。	28
(12) 情報発信(広報, ウェブサイト, シンポジウム, セミナー等)は十分に行われています か。	29
総合	30
(13) 教育・ソーシャルデータサイエンスプログラムの活動状況について, 総合的にどの	

ように評価できますか。.....	30
(14) その他, これからの教育・ソーシャルデータサイエンスプログラムに何を求めます か。ご意見をご入力ください。.....	31
V. 評価結果を踏まえた今後の改善策	32
1. 平均評価点一覧	32
2. 今後の改善策.....	33

I はじめに

広島大学大学院人間社会科学研究科は、人間と社会のための諸科学を追及すること、また、教育による持続可能で平和な世界の構築を目指すことという 2 つのミッションを有し、これらに副って、人間や社会に関する深い見識と専門分野以外への強い関心を持ち、自然科学や生命科学を含む他分野の専門家と協働して将来の人類社会を創造する人材を育成することを目的として、2020 年に設置された。

その後、文部科学省事業「デジタルと掛けるダブルメジャー大学院教育構築事業 令和 4 年度選定事業」に採択されたことを受け、教育学や経済学・経営学の分野の専門性と数理・データサイエンス・AI の素養を併せ持つ人材を育成することを目的として、2025 年に教育データサイエンスプログラム、ソーシャルデータサイエンスプログラムの 2 つの学位プログラムが博士課程前期に設置された。AI・データイノベーション教育研究センターや大学院先進理工系科学研究科等と連携し、各プログラムでの研究指導を、人文社会科学分野の教員と数理・データサイエンス・AI 分野の教員が協働して行うこと、分野の異なる学生がデータ解析等の実践的作業を通じて一緒に課題解決を体験する科目を学ぶことといった取組を通して、他分野の専門家と協働して、産業界、学校現場、行政等における DX を強力に推進するエキスパート人材を輩出し、「総合知」による Society5.0 の実現の一端を担うべき人文社会科学分野の人材不足という課題の解決を目指している。

このたび、教育データサイエンスプログラム及びソーシャルデータサイエンスプログラムにおいて、事業採択から 3 年が経過し、また、本年度、博士課程前期が順調にスタートしたことを受け、本学の連携大学・連携機関であり、かつ、日本の高等教育、データサイエンス関連に精通されている学外有識者 7 名の方に外部評価をお願いした。

両プログラムの発足から現在に至るまでの学務関連の諸事項、学生の受入れ、学生生活・進路、DX 推進人材育成大学院ダブルメジャー事業等を中心に評価していただき、両プログラムの問題点や今後の課題をご指摘いただけたことは、両プログラムを、ひいては本研究科をさらに充実させるための大変貴重な機会となった。

本報告書は、その評価結果をまとめたものである。今後、本研究科でこれを重要な経過点とし、より良い教育の実現を目指す。

II 外部評価委員会委員一覧

【学外委員】

(敬称略)

所属機関名・役職名	氏 名
中国電力株式会社エネルギー総合研究所 (技術開発) 部長	三浦 良平
一般社団法人中国経済連合会 専務理事	谷口 雅彦
比治山大学 学長	宮谷 真人
広島文化学園大学・短期大学 学長	坂越 正樹
東広島市教育委員会 教育参与	榊原 恒雄
東広島市教育委員会 生涯学習部長	福光 直美
広島県教育委員会学校経営課 総括指導主事	豊田 由之

【学内委員】

役職名	氏 名
広島大学大学院人間社会科学研究科 研究科長	松見 法男
広島大学大学院人間社会科学研究科 副研究科長 (評価担当) ソーシャルデータサイエンスプログラム長	鈴木 喜久
広島大学大学院人間社会科学研究科 教授 教育データサイエンスプログラム長	田中 秀幸
広島大学大学院人間社会科学研究科 教授 教育データサイエンスプログラム 副プログラム長	松原 主典

Ⅲ 外部評価実施概要

2025 年 9 月 26 日（金）13：30 より，外部評価委員会の学内委員及び学生の説明に基づき，学外委員に対してヒアリングを行った。

学外委員からは，現状に対する忌憚のない意見や助言をいただき，活発な意見交換が行われた。

なお，都合により当日欠席となった学外委員 2 名に対しては，9 月 25 日（木）及び 30 日（火）にそれぞれ個別にヒアリングを行った。

1. 概要

(1) 日時：2025 年 9 月 26 日（金）13：30～15：30

(2) 会場：広島大学 東広島キャンパス 教育学部管理棟 2 階 第 3・4 会議室

(3) タイムテーブル：

時刻	内容	担当者
13:30～13:40	開会挨拶及び全体概要説明	人間社会科学研究科長 松見 法男
13:40～13:55	教育データサイエンスプログラムの取組	教育データサイエンスプログラム長 田中 秀幸
13:55～14:10	ソーシャルデータサイエンスプログラムの取組	ソーシャルデータサイエンスプログラム長 鈴木 喜久
14:10～14:20	教育データサイエンスプログラム所属学生の修学状況 「教育データサイエンスプログラム参加と成果報告」	博士課程前期 1 年 加藤 宗一郎
14:20～14:30	ソーシャルデータサイエンスプログラム所属学生の修学状況 「ソーシャルデータサイエンスプログラムの魅力について」 ※ビデオコメント	博士課程前期 1 年 植木 恵理奈 大西 佑菜
14:30～14:40	休憩	
14:40～15:30	意見交換	
15:30	閉会挨拶	人間社会科学研究科長 松見 法男

2. 評価項目

【 ①学務関連 】	
(1)	教育・ソーシャルデータサイエンスプログラムの基本理念，輩出する人材像は，社会の要請を反映したものになっていますか。
(2)	教育・ソーシャルデータサイエンスプログラムのカリキュラムは，必要な内容を含み，体系的な編成となっていますか。
(3)	学務関連活動を企画・運営する上で，学内の関連部局と連携し，必要な運営体制が適切に整備され，機能していますか。
(4)	教育リソース（ICT 環境，統計データ利活用等）は適切に整備されていますか。
【 ②学生の受入れ 】	
(5)	学生の受入れについて，入学者受入方針に沿った，適切な体制により受入れが行われていますか。
(6)	学生の受入れについて，入学定員に対して適切な数の入学実績が上がっていますか。
【 ③学生生活・進路関連 】	
(7)	学生入学後の初期指導・オリエンテーションは充実していますか。
(8)	学生のニーズに応え得る学習相談・キャリア相談・ハラスメント相談の体制を整備し，助言，支援が行われていますか。
【 ④DX 推進人材育成大学院ダブルメジャー事業 】	
(9)	DX 推進人材育成大学院ダブルメジャー事業の実施計画・継続性は，十分なものになっていますか。
(10)	DX 推進人材育成大学院ダブルメジャー事業選定時において付された留意事項への対応は，適切に行われていますか。
【 ⑤その他 】	
(11)	他教育機関・企業・自治体等との連携は十分に活用されていますか。
(12)	情報発信（広報，ウェブサイト，シンポジウム，セミナー等）は十分に行われていますか。
【 総 合 】	
(13)	教育・ソーシャルデータサイエンスプログラムの活動状況について，総合的にどのように評価できますか。
(14)	その他，これからの教育・ソーシャルデータサイエンスプログラムに何を求めますか。ご意見をご入力ください。

3. 評価レベル

5段階評価：5 特に優れている 4 やや優れている 3 普通 2 やや劣っている 1 劣っている

4. 配付資料

- (1) 外部評価委員会 次第・委員名簿・配席図
- (2) 「人間社会科学研究科 教育・ソーシャルデータサイエンスプログラム評価表」ご入力をお願い
- (3) 広島大学大学院人間社会科学研究科教育科学専攻教育データサイエンスプログラム資料
- (4) 広島大学大学院人間社会科学研究科人文社会科学専攻ソーシャルデータサイエンスプログラム資料
- (5) 教育データサイエンスプログラム参加と成果報告
- (6) 広島大学シラバス
 - ・統計解析の基礎（両プログラム共通科目）
 - ・機械学習の基礎（両プログラム共通科目）
 - ・計算社会科学（ソーシャルデータサイエンス科目）
- (7) 参考資料 1

令和 4 年度大学教育再生戦略推進費デジタルと掛けるダブルメジャー大学院教育構築事業
～X プログラム～申請書
- (8) 参考資料 2

デジタルと掛けるダブルメジャー大学院教育構築事業 ～X プログラム～
令和 4 年度選定事業 中間評価調書
- (9) 人間社会科学研究科リーフレット

5. 意見交換概要

※「学外外部評価委員」欄の記号は、4 ページの外部評価委員一覧と順不同である。

学外外部 評価委員	質問・意見・要望等	学内外部評価委員回答
A	社内の DX 化の一環として、広島大学情報科学部と連携して、初級編・応用編の AI 研修を開発中である。 現在、技術開発だけでなく、事務系の人材が地域のニーズに応じた事業開発を担うようになってきている。技術と社会的ニーズをつなぐ活動が「文理融合」の一例と捉えられる。人文社会科学の知識を持つ人材がデータサイエンスを学ぶことは、事業開発において非常に意義がある。	・従来、この分野の研究は理系中心で、技術開発やデータ処理が主軸だったが、現在は、人間の存在やコミュニケーションの重要性を重視する方向へ転換が求められている。本学の本事業の採択は、文部科学省からのメッセージと捉えられる。人間対人間のコミュニケーションができて初めて機械とのコミュニケーションが可能になるため、人間の存在を中心に据えたデータサイエンス教育、人材の育成が、研究科にとって重要な使命となっている。

	学生の多くが4年で卒業し就職すると思われるが、博士課程前期を2年で修了し、社会に出るということか。一方で、4年で卒業し、社会で活躍できる人材の育成が社会で求められているとの見方もある。	・学部4年で卒業し就職する学生もいれば、博士課程前期に進学する学生もいる。 ・即戦力となる学部卒人材の育成が求められているという示唆をいただいたものと受け止めた。 ・情報科学部、教育学部、経済学部などの学部間連携による教育の必要性が高まっている一方、大学内では学部単位での人材養成を行っており、いわゆる「テリトリー」が存在し、融合的な教育の実現にはまだ課題がある。教養・専門を十分に身につけることは学部4年間では難しくなっており、教育内容の再構築が必要となっている。 ・社会的に、18歳人口の減少により、大学は学部定員の縮小を迫られており、文部科学省は、教育の質を維持するために、博士課程後期の学生の質と量を高め、国際社会で活躍できる人材の育成を強化する施策を進めている。大学院教育と学部教育の接続・連携の促進が今後の大きな課題である。
B	経済団体として、国や行政、大学など多様な関係者と関わる中で、現在最も求められているのは「エビデンス・ベースド (evidence-based)」の考え方であり、教育データサイエンスプログラム及びソーシャルデータサイエンスプログラムで取り組んでいる活動は非常に時宜を得たものであると感じている。特に、教育データサイエンスプログラムでは、育成したい人材像が出口の観点から明確に示されている点が良いと評価している。 現在、日本の教育全体に対して「何を学ぶべきか」が問われている。経済産業省が推進する STEM 教育も、「エビデンス・ベースド」の考え方に基づいており、今後のグローバル社会では客観的な根	・両プログラムを評価いただき、また両プログラムへのご支援、ご協力のお申し出をいただき、感謝いたします。

	拠に基づいた議論やものづくりがますます重要になると考えている。教育データサイエンスプログラム及びソーシャルデータサイエンスプログラムの活動の成功を願っており、支援できることがあれば協力したい。	
	教育データサイエンスプログラム及びソーシャルデータサイエンスプログラムの特徴や他大学との違い、強み等を教えてほしい。	・教育データサイエンスプログラム 本学が拠点となっている「数理・データサイエンス・AI 教育教科拠点コンソーシアム」の中国ブロックで、一緒に参加していた岡山大学も本学と同時期に文部科学省事業に採択され、教育学研究科に教育データサイエンス学位プログラムが開設されている。岡山大学では同プログラムが博士課程前期にのみ開設されているが、本学の教育データサイエンスプログラムは令和 9 年度に博士課程後期を開設し、博士課程前期から博士課程後期まで一貫した教育研究体制を構築していくところに特徴がある。それにより、将来的にデータサイエンスを教える人材の育成が可能である点が大きな強みである。 ・ソーシャルデータサイエンスプログラム 本学には、情報科学部を母体とした理工系の大学院が設置されているが、そちらが主としてエンジニアを養成することを目的としているのに対し、本プログラムでは、社会科学系のバックグラウンドのある者を対象としており、社会科学系であっても一定レベルのデータサイエンスの知識・技能を習得させていることが特徴となっている。 また、2023 年度に一橋大学にもソーシャルデータサイエンス研究科が設置されているが、理論研究が中心となっており、一定レベルの数学の基礎知識が求められている。一方で、本プロ

		グラムでは、数学や情報科学の基礎知識がなくても、入学後に「DX 基礎科目」等で基本的な R 言語や Python の習得から出発し、基礎レベルから実際に社会で役に立つレベルまで引き上げることが特徴となっている。
	企業でも DX を推進しているが、現状では目的が業務の効率化に偏っており、事業そのものの変革にはつながっていないと感じている。単なる効率化ではなく、仕組み自体を変え、新しい価値を生み出すことが重要である。そのため、教育データサイエンスプログラム及びソーシャルデータサイエンスプログラムにおいても、生産性や効率の向上だけでなく、「新しい価値創造のための DX」という視点を意識して教えてもらえると非常にありがたい。	・我々のミッションの具体化に関わる重要な視点である。 ・今後の教育におけるキーワードは「生成 AI」であり、日本だけでなく世界的な課題となっている。文部科学省は 2023 年 12 月に教育現場向けの生成 AI ガイドラインを発表したが、リスク回避に重点が置かれており、海外（欧米諸国、シンガポール、オーストラリア等）と比べて対応が遅れている。海外では、教師が生成 AI を使う際のチェックリストが整備されており、実践的な活用が進んでいる。これに対し、日本では技術の進展に対して、「生成 AI を人間が豊かになるためにどう使うか」という根本的な問いが欠けており、哲学的・倫理的・心理学的な視点が追いついていない。近い将来、子どもたちが生成 AI を使う時代が到来するため、教育現場ではそれを前提とした人材育成が必要とされている。広島県では、令和 5、6 年に牛田中学校がパイロット校として指定を受け、理科・数学で生成 AI を活用した授業を展開したが、現場では使い方に混乱が見られる状況にある。教育 DX の本質は、教師が一方向的に教えるスタイルから、生成 AI を活用した「個別最適な学び」「協働的な学び」への転換であり、教師の役割も“Teacher”から“Facilitator”へと変革されるべきである。
E	必修教科「情報」の開設及び文部科学省「GIGA スクール構想」の推進で、「情報」を担当することができる教員が不足	・現在、広島県及び広島市の教育センターと協働し、大学教員の作成したオンデマンド授業を活用し、現場の教員が

	し、学校現場の教員の負担が増加し、教育委員会では対応に苦慮している。教育委員会では「情報」を担う教員や指導主事の育成、大学では「情報」の教員免許取得者の増加を図ることが急務となっていると考える。大学にとっても、教員を目指す学生の獲得につながるため、教育データサイエンスプログラム及びソーシャルデータサイエンスプログラムでも専修免許状の取得ができるよう体制を整えていただきたい。	基本的な内容を学べるような研修カリキュラムを構築中である。現場の教員への研修の在り方について、今後、大学側がどう関わるべきかご示唆をいただき、引き続き協働で現職教員の支援に取り組んでいきたい。 ・教員免許に関しては、現在、教育データサイエンスプログラムに在籍している学生が、専修免許を取得し、生成 AI を活用した英語教育の実践を研究している事例がある。同プログラムでは、他プログラムで課程認定を受けている科目をあわせて受講することができ、免許の取得要件を満たすことができるように整備している。
	教育データサイエンスプログラム及びソーシャルデータサイエンスプログラム所属学生（計 7 名）の出身大学・学部や社会人経験等、バックグラウンドについて、より具体的な情報が知りたい。	・教育データサイエンスプログラム（5 名） ①広島市の中学校教員（英語、ICT 担当）経験者。他大学出身。学校現場の DX 化、英語の授業における生成 AI による振り返りを研究テーマとしている。 ②広島大学職員経験者。他大学出身。子どもの日本語学習を生成 AI で支援するプログラムの構築を研究テーマとしている。 ③外国人留学生（中国出身）。中国の大学出身。言語学の観点からデータサイエンスに関心をもち受験した。 ④広島大学教育学部第二類（科学文化教育系）技術・情報系コースからの進学者。教育委員会と連携したデータサイエンス教育に関心をもち受験した。 ⑤広島大学教育学部第五類（人間形成基礎系）心理学系コースからの進学者。 ・ソーシャルデータサイエンスプログラム（2 名） ⑥他大学の経済系の学部出身。商工会の事務職員として、データを取り扱

		う業務を担当するなかでデータサイエンスに関心をもち、体験セミナーを受講し受験した。(現職) ⑦他大学出身。元看護師で、現在は、企業にて、社員との業務上のやりとりを通して社員のコンディション、面談の必要性等の情報を把握し、社員の心理的サポートを行う業務に従事している。(現職) ・以上のとおり、多様なバックグラウンドをもつ学生が所属している。
	入学試験の実施状況として、不合格を出した実績があるか知りたい。	・今年度実施した入学試験において、現在のところ、教育データサイエンスプログラムでは、学部進学者 1 名、社会人 2 名が合格している。12 月及び 2 月にも入学試験を計画している。また、ソーシャルデータサイエンスプログラムでは、2 月に入学試験を計画している。 ・昨年度実施した入学試験においては、教育データサイエンスプログラムで外国人留学生 1 名を、ソーシャルデータサイエンスプログラムで学部進学者 2 名を、筆記試験、口述試験及び学業成績証明書を総合して不合格と判定した。
F	教育データサイエンスプログラムでは、東広島市と連携し、学校教育や生涯教育に関する PBL（課題解決型学習）を通じて、自律的・実践的な課題分析力を育成している。従来の生涯学習が趣味・教養中心だったのに対し、今後は地域の課題の解決に向けた学びのプログラムを重視し、データサイエンスを活用して協働して進めていきたい。	・本学は、文部科学省からの強い推薦を受け、2024 年 8 月に申請書を提出し、9 月に採択された。申請前から文部科学省より「地域のデジタル化との連携」を要請されており、東広島市教育委員会に協力を依頼し、現在、M1, M2 の学生が現場体験を通じて課題を持ち帰り、演習で解決策を考えるというかたちで連携が進んでいる。 ・博士課程後期開設後も、大学側から積極的な提案を行い、現場での実践を通じて教育や生涯学習の場に貢献していくことを目指している。例えば、公民館での学びに活用できるプログラムを導入するなどの展開を想定して

		いる。
	学部からの進学者、社会人学生、それぞれの修了後の進路先でデータサイエンスの知識が活かせる可能性はあるのか。	学生のカリヤパスについては、大学側として見守っていく必要があるが、社会的な要請に十分対応できる可能性がある。教員採用では、データ分析や実証研究ができる人材を重視する方向にシフトしている。また、データサイエンスの知識は、一般企業（教材関連やデータ活用企業）でも活かされる可能性がある。また、留学生が母国に帰ってデータサイエンスを活用するケースも想定される。社会的な要請が今後高まるが見込まれる。
	ダブルメジャー制度は初の試みであり、その利点が社会のニーズとどう結びつくかが不透明である。制度の成果やアウトプットが明確になることが望まれる。	ダブルメジャー制度は、例えば、理科教育を専門とする教員志望の学生が、データサイエンスの知識を併せ持つことで、教育現場での教材・指導案の適切性をより論理的に判断できるようになる点に意義がある。生成 AI をツールとして活用することで、質の高い教材を作成する力や、実験の組立方、批判的視点の持ち方等を生徒に教える力の向上が考えられる。教科教育を目指す学生には、ぜひデータサイエンスの修士号の取得を推奨したい。ただし、受入れ人数には限りがある。そのため、博士課程前期修了が難しい場合には、例えば、希望者には、博士課程前期修了要件のうち、特定の科目を受講することで、「履修プログラム証明書」を発行することができるような仕組みを設けることも検討している。
	2018 年度の情報科学部の設置の際、東広島市役所で広島大学との連携を担当していた経験から、情報科学は単なる技術だけでなく、福祉や教育など多分野と関わる必要があると感じていた。人間の活動の中に社会教育があると捉えている。現在の「文理融合」の考え方はその延長線上にあり、ソーシャルデータサ	- 文理融合のデータサイエンスとして、DX を進めつつ、文化的な活動としても深みのある学位プログラムを目指すため、プログラム教員会で検討を進めている。 - 情報科学部には理系・文系両方の選抜区分があるが、教員の構成としては理系が多く、教育内容が理論・技術寄り

	イエンスや教育データサイエンスを軸にしてどう展開されるかに関心がある。	の傾向が強いため、文系で入学した学生が数学（特に数学Ⅲや統計）の基礎知識が不足していることにより、授業についていくことに苦勞している状況にある。また、教えている教員も対応に苦慮している。文系の学生向けに経済学部との連携（ゼミなど）を模索したが、現段階では実現には至っていない。こうした学生には大学院で基礎から学び直す機会を提供することが有効ではないかと考えている。 ・従来から社会科学分野、特にマーケティングの分野での活躍が期待されていたが、経済学分野でも実証研究やデータ分析の重要性が高まっており、機械学習に計量経済学の手法を取り入れた学術的分析等、新たな手法が着目されている。事象分析に比重が移りつつある。将来的に、経済・マネジメント・ソーシャルデータサイエンスを一体的に運営することも考えられる。 ・東広島市生涯学習課との連携の中で、「パソコンは使えても人と向き合えない人材」では困ると、教育の重要性が強調された。教育データサイエンスプログラム及びソーシャルデータサイエンスプログラムでは、「デジタルとアナログの教育実践の融合」を基本理念の1つとして掲げている。一方的な課題の押し付けではなく、現場の課題に向き合い、長期的視点で取り組む姿勢が必要と考える。日本は世界から遅れているとされるが、人間中心の視点からアプローチすることも重要であると考え。東広島市と協働し、教育の実践と地域社会とのつながりを深めていきたい。 ・2030年のSDGsの目標達成に向けて、日本国内では達成が進んでいる分野もあるが、未達成の分野も存在する。その一因として「産学連携の不足」が
--	--	--

		挙げられる。従来、「官」と「学」で進められていた教育が、今後は産業界からの助言や協力を得ることで、目標達成が促進される可能性がある。 ・従来、教育者は「収益を得ること」に慎重な姿勢があったが、現在は教育学部でも起業（アントレプレナーシップ）を視野に入れる時代となっている。学生が自ら開発した教育プログラムを活用して起業する可能性があり、教育の新たな展開として期待されている。
	文部科学省の委託期間終了後の財源確保など、プログラムの持続可能性について、大学はどのように考えているのか。良い取り組みであり、東広島市としても卒業生を職員として採用したいと考えているが、継続性の面での見通しを教えてください。	・予算の持続性と、支援終了後の運営体制が課題と考えている。入試の工夫や教育課程の充実化によって、他分野・領域からの学生の受け入れも推進していく。
G	大学院修了時に何を身に付けるかが人材育成の核心であると認識した。アドミッション・ポリシー、カリキュラム・ポリシー（シラバス）、ディプロマ・ポリシーに基づき、「データサイエンスの博士課程前期を修了したことで何ができる人材になるか」を明確にする必要がある。現在は中間評価の段階だが、最終的な評価は社会での活躍を基準に判断されるべきである。 学生の多くは「所属企業で必要な研究」や「学校現場で役立つ知識」を目的にデータサイエンスを学んでいるが、ダブルメジャーという先進的な取組を活かし、今後は、特定の分野に関わらず、どこでも通用する汎用的な能力を持つ人材、そして、この分野でのリーダーとなる人材を育成できる教育観に立っていただきたい。 大学進学を目指す高校生に対して、「広島大学に進学すれば、こういう将来につながる」という社会的に魅力のある	・我々の最も大きな課題の1つは、「このプログラムの魅力をどうやってアピールしていくか」である。現在、所属している学生がまだM1の段階であるため、最終評価をいただく際には、「そういった魅力が外にアピールできるようになりました」と言えるように進めていきたい。 ・経済学部卒業生が総合商社に就職し、数年後に社内でAI開発を担当するようになった事例がある。文系出身でも、AI開発やシステムエンジニアなど、理系的な職に就くケースは増えている。日本では文系・理系の区分が根強いが、実際にはその垣根を越えたキャリアが可能であることを「見える化」して広く伝えることが重要である。なお、上記卒業生はその後、AI開発で起業した。社会的に、30代前後での転職・起業が一般的になってきている。多様なキャリアパスを学生に示し、企業や教育関係者との情報交流を

	進路実績をアピールし、そして、学部生に対しても、「行きたい」と思える大学院であることが重要である。 こうした大学院の教育内容と成果が社会に認知されることが、持続可能性につながる。 国際教育開発プログラムのように、母体となる学部がなくても進学者を集めているプログラムの例もある。こうしたプログラムの発展の検討が望まれる。	通じて、学部生にも広く可能性を開いていきたい。 工学的な視点では、「対象をいかに知るか」が制御やマネジメントの基本であり、理解不足はリスクにつながる。データサイエンスも同様に、データに基づいて対象を深く知ることが重要である。定量的なデータだけでなく、定性的なデータ（人間の感情や行動など）を扱えることが、人間社会科学研究科の強みと考える。工学では対応が難しい問題も、人間理解の視点から解決の糸口が見える可能性がある。「何ができるようになるか」という問いに対して、人間と技術の両面からのアプローチを追究していくことが重要と考える。
--	--	---

